

MOBOTARO

ナレーター　むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは毎日山へ柴刈りに。おばあさんは毎日川へ洗濯に行きました。ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、川上から桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。おばあさんが拾って食べてみると、なんとも美味しい桃でした。

おばあさん　なんて甘くて美味しい桃でしょう。おじいさんにも持って行ってあげたいが……。

ナレーター　そう思ったおばあさんは、流れてくる桃に語りかけるように言いました。

おばあさん　うまうまい桃はこっちにこい。にがうまい桃はあっちへいけ。うまうまい桃はこっちにこい。にがうまい桃はあっちへいけ。

ナレーター　すると、中でもひととき大きな桃が、おばあさんの方へ流れてきました。

おばあさん　これは大きくて美味しいそうな桃だこと。きつとおじいさんも喜んでくれるでしょう。

ナレーター　おばあさんは、よっこらせと桃を拾い、家へ持って帰りました。夕方になると、おじいさんが柴刈りから帰ってきました。朝からずっと山の中にいたので、くたくたに疲れています。

おじいさん　ばあさん、今戻ったぞ。喉が渴いてかなわん。水を一杯もらえるかの。

おばあさん　おじいさん、それなら水より良いものを川から拾ってきたで。それをおあげり。

ナレーター　おばあさんは大きな桃を、おじいさんに差し出しました。

おじいさん　おーおー。これは立派な桃だ。二人で仲良く半分こにしよう。

ナレーター　二人が桃を切ろうとすると、桃は一人で勝手に動き出し、パカッと二つに割れて、中から男の子の赤ん坊がオギャアオギャアと産まれてきました。

おばあさん　これはこれは可愛い赤ん坊なこと。大変じゃあ。

おじいさん　この子は桃の中から産まれたのだから、桃太郎と名付けよう。

おばあさん　そうですね。桃太郎。良い名前ですねえ。

ナレーター　おじいさんとおばあさんは、びつくりするやら嬉しいやら。大急ぎで湯を沸かし、産湯につかせ、着物をこさえて、産着にくるみました。そして、かわるがわる抱き上げては、たいそう可愛がりました。

おじいさん　桃太郎や、こっちにおいで。

おばあさん　桃太郎。さ、これをお食べ。

ナレーター　おじいさんとおばあさんは、二人してお粥を食べさせたり、魚を食べさせたり、新しい着物を着させたり。大事に大事に桃太郎を育てました。桃太郎は、一杯食べると一杯だけ。二杯食べると二杯だけ。三杯食べると三杯だけ大きくなりました。そして、一を教えれば十まで分かる。それはそれは力持ちで、大変賢い子供に育ちました。おじいさんとおばあさんと桃太郎は貧しいながらも、とても幸せに暮らしていました。

桃太郎　それじゃあ、じい様、ばあ様。オラは山に柴刈りに行ってきます。ゆっくり休んでいてください。

おばあさん　桃太郎や、気を付けるのですよ。

おじいさん 山の薪はこの家だけのものじゃない。この間のように、全部取ってくるんじゃないぞ。

桃太郎 大丈夫です。その時は皆で薪を分けましょう。その間に村の皆は農作業に精が出せます。

おばあさん お前は本当に優しい子に育ってくれましたね。力持ちであることよりも、賢いことよりも、私は何よりそれが嬉しい。

桃太郎 オラのすべては、じい様とばあ様のおかげです。今はまだ大したことはできませんが、いつかきつと恩返しをします。それまでどうかお元気で。

おじいさん 何を言う、桃太郎。お前が産まれてくれて、わしとばあ様がどれだけ救われたか。恩返しなど考えず、お前はすすく育ってくれば、それが一番の幸せだ。

桃太郎 はい。わかりました。

ナレーター そうして桃太郎は山へ柴刈りに出掛けました。村に危機が迫っていることなど露ほども知らずに

村人 鬼だ〜!! 鬼が出たぞ〜!! 皆逃げろ!! 鬼が出たぞ〜!!

ナレーター 近隣諸国を賑わせていた鬼が、とうとうこの村にもやって来たのです。

赤鬼 なんだ、この小さい村は。…何も無いな。

おじいさん お、お前は赤鬼か?!

赤鬼 俺を知っているのか?! こんな何も無い村にまで、俺は知れ渡っているのか。そうか。

村人 じいさん!! 危ないぞ!! 相手は極悪非道な赤鬼だ!! 話をすれば孫の代まで祟られるぞ!!

赤鬼 祟る? 俺が? 何を?

村人 鬼め!! この村には何も無いぞ!! 去るがいい!!

村人　こんな村までその手にかけるつもりか!!

村人　憐みの心は無いのか!! 鬼め!!

赤鬼　待て、俺は……!!

村人　鬼が動いたぞ!!

村人　女・子供は家に入れろ!! 鬼が来るぞ!!

村人全員　鬼が来るぞ!! 鬼が来るぞ!! 鬼が来るぞ!!

赤鬼　お前達も……そうか……ならば……望み通り、鬼の力を味わうが良い!!

ナレーター　鬼の力は凄まじく、村人は皆動けないほどの傷を負いました。そんなことになっているとは思いません

しなない桃太郎。山で柴刈りに一生懸命です。そこへ一羽のカラスが飛んできて、桃太郎のそばで鳴きました。

カラス　カー。カー。桃太郎や桃太郎。薪を拾って何になる。じい様ばあ様おいてなんとする。鬼が

村を襲っている時に、お前は薪を拾ってなんとする。じい様ばあ様怪我して動けぬ時に、お前は一人、何をする。

桃太郎　何!?! じい様とばあ様が怪我をしただと?! 鬼が出ただと!?!

ナレーター　山の奥深く・深く入っていた桃太郎ですが、カラスの言葉を聞いた桃太郎は、一呼吸も休むこと

なく、走って村へ戻りました。しかし、村へ帰った桃太郎が目にしたものは、かつて見たことのない、凄惨な光景でした。

桃太郎　じい様!! ばあ様!!

おじいさん おお。桃太郎。お前は無事だったのだな。良かった、良かった。

桃太郎 これは一体……どうしたのですか？

おばあさん 鬼だよ。……赤鬼が来たんだ。でもね、

村人 そうだ、赤鬼だ!! 赤鬼が攻めてきたんだ!!

村人 刀を持って攻めてきたんだ!!

桃太郎 刀を持って……？

村人 あんな乱暴者、この世にいるはずもない! まさしくあいつは鬼だ!!

村人 私たちの平和をおびやかす、鬼の一族だ!!

村人全員 鬼の一族だ!! 鬼の一族だ!!

ナレーター 平和だった村に突然の鬼の襲来。村人たちは口々に鬼の強さを訴えました。ただ一組の家族、お

じいさんとおばあさんを除いては。

おじいさん 桃太郎や。もしかしたら、赤鬼は……。

桃太郎 はい。分かっています。刀を持ちながら、村人の誰も殺してはいません。もしかしたら赤鬼は……。

ナレーター 桃太郎は少し考えてから――。

桃太郎 ですが、いえ、だからこそ。このまま赤鬼を見過ごすことはできません。じい様・ばあ様。オラが

鬼ヶ島に行き、鬼退治をします。

おばあさん 何を言う、桃太郎。お前はおじいさんと二人でやっと大きくしただ。そんなおつかねえところによ

れるものかい。

おじいさん そうだ。可愛い可愛いお前を、どうして鬼退治になど行かせられるか。

桃太郎 誰かがやらねばならぬことです。オラは村一番の力持ち。どうか、どうかお許しください。

ナレーター 必死に止めるおじいさんとおばあさんでしたが、桃太郎は鬼退治に行くと言ってきません。

おじいさん わかった。そこまで言うなら、もう止めはせん。しっかり準備をして出るがよい。

ナレーター おじいさんとおばあさんは、しまいにはそう言つて、千里履いても切れない鋼のワラジや、新しい羽織、しゃんとした刀を用意しました。桃太郎は、最後にハチマキを締めると、

桃太郎 じい様・ばあ様、ありがとうでございます。オラ、立派に鬼退治をしてきます。

おじいさん 桃太郎。お前がどんなに力自慢であっても、鬼の強さには敵うまい。共に歩んでくれる仲間を探すことじゃ。

桃太郎 分りました。

おばあさん 気を付けて行くんだよ。

桃太郎 はい。

おばあさん それから……これを持ってお行き。

桃太郎 これは？

おばあさん 日本一のきび団子さ。いざというとき、これを食べれば百人力がお前に備わるだろう。

桃太郎 ばあ様……ありがとございます。……行ってきます。

ナレーター 桃太郎は元氣いっぱい村を出ました。鬼ヶ島は村から七つの山を越え、七つの谷を越え、海を渡った遠い遠いところにあります。桃太郎はズンズンと歩いて行きました。桃太郎が二つ目の山を越

えたとときです。目の前から犬がヨタヨタと歩いてきました。

伊又 ああ……もう駄目だ……。

桃太郎 どうしたんだ？

伊又 腹減つて死にそうなんです。もう三日もロクに食べていません。

桃太郎 それは可哀そうに。オラの残り物のオニギリで良ければあげよう。

伊又 え、いいんですか？それはありがたい。

ナレーター 桃太郎は、自分のオニギリを分けてあげました。

伊又 ああ、美味しい。なんて美味しいオニギリなんだ。

桃太郎 そんなに慌てずとも、誰も取りはしないさ。ゆっくりお食べ。そら、お茶も飲むと良い。

ナレーター イ又はオニギリをむしゃむしゃと食べ、お茶をゴクゴクと飲みました。

伊又 ふー。おかげで生き返りました。恩人の名前をお聞きしたい。

桃太郎 オラの名前は桃太郎。

伊又 桃太郎さん。あなたはそんなに勇んでどこに行くおつもりなんです？

桃太郎 鬼ヶ島に鬼退治に。

伊又 正気ですか、桃太郎さん。鬼の力は人間が敵うものではありません。

桃太郎 だが誰かがやらねば悲しい想いをする者が増える一方。オラは自分の力を信じる。

伊又 そうですか。分かりました。それならば僕も共に行きましょう。僕の名前は伊又。受けた恩を返

すのが僕の流儀です。

桃太郎 それは助かる。ならばこれをあげよう。

イヌ これは何ですか？

桃太郎 日本一のきび団子。いざというときに、これを食べれば百人力。

ナレーター 桃太郎はイヌにきび団子を分け与えると、2人でズンズンと歩いて行きました。4つ目の谷を越えた時、凄じ勢いで何かが桃太郎の横を突つ切つて行きました。

サル へへへん。いったき。

イヌ あつ、桃太郎さん、きび団子が。

サル これは美味そうな団子だな。後でゆっくり食べるとしよう。

桃太郎 待て。お前は誰だ。

サル 俺の名前はサル。この辺りの山と谷を縄張りにしてるんだ。俺に狙われたのが運の尽き。命だけは助けてやる。団子は諦めるんだな。

桃太郎 そのきび団子はオラの為にはあ様が一生懸命作ってくれたもの。ただのきび団子ではない。日本一のきび団子だ。どうか返して欲しい。

サル 日本一のきび団子……。そんな事を聞いたら益々返すわけにはいかないな。

イヌ おいサル。お前は何故こんな事をする。

サル 何故だ？そんなの面白いからに決まってるだろ。他人の悔しそうな顔を見るのは何より愉快だ。

桃太郎 それだけが目的ならそのきび団子でなくともいいだろう？それは一つ食べれば百人力のきび団

子。オラ達にはそれがどうしても必要なのだ。

サル 一つ食べれば百人力？そんなものが必要って、お前達は何をするつもりなんだ？

イ又 桃太郎さんはこれから鬼ヶ島に行き鬼退治をするのだ。その為には日本一のきび団子は必要不可欠。

サル 鬼ヶ島に鬼退治だと？人間のお前がか？これはとんだ大馬鹿野郎が居たもんだ。

桃太郎 だが誰かがやらねばならん事だ。どうか邪魔をせずきび団子を返して欲しい。代わりに他のものなら何でも渡そう。

サル 鬼退治か……鬼退治ね。そんな事考えたことも無かつたぜ。よし面白いじゃねえか。俺も一緒に行ってやる。

桃太郎 何？

サル そんな面白そうな事をお前達で独り占めさせるもんか。俺も交ぜろ。きび団子は返さないけどな。

イ又 どうします桃太郎さん。こんなヤツを連れて行くんですか？

桃太郎 だがきび団子はサルが持ったままだ。仕方ないだろう。……おいサルよ。大怪我をするかもしれないのだぞ？それでも良いのか？

サル 分かかってないな、その可能性があるから面白いんだろ？

桃太郎 そうか。それでは一緒に行こう。きび団子は大切に持っていてくれ。

ナレーター こうしてサルも一緒に鬼ヶ島を目指すことになりました。桃太郎とイ又、サルはズンズン歩いて行

きます。そうしてフツの山と谷を越えた時、海の方こうに鬼ヶ島が見えました。しかし、その行く手を阻むように大きなキジが現れたのです。

キジ お前達。ここからどこへ行くつもりだ。

桃太郎 鬼ヶ島に鬼退治に。

キジ 人間が鬼に敵うわけがなからう。命を粗末にするな。大人しく村へ帰るがいい。

サル やいはいはい。こちらら山超え谷超えやっこさここまで来たんだ。誰だか知らねえが好き勝手なこと言つてんじやねえぞ。

キジ 私の名前はキジ。ここでお前達のような命知らずに自らの無力さを教えている者だ。

桃太郎 だが鬼退治は誰かがやらねばならぬ事。どうかここを通してもらえぬだろうか。

キジ どうしてもと言つのなら、この私に力を示すが良い。

ナレーター そう言つてキジは持っていた扇子でひと扇ぎ。するとこうこうと音が鳴つてすさまじい風が桃太郎達を襲いました。

キジ 他愛もない。その程度の力で鬼退治をしようなど思い違いも甚だしい。さあ村へ帰られよ。

桃太郎 今のオラが弱いというのなら、オラは今すぐ今よりも強くなる。一人の力が弱くとも、仲間の力を借りて強くなる。

キジ まだ向かつてくるつもりか。怪我をしても知らんぞ。

ナレーター キジは再び扇子を構えると、今度は何度も扇ぎました。風がこうこうと音を立てて桃太郎達を襲います。桃太郎は飛ばされぬよう必死に堪えました。それでも限界がこようとした時、まず桃

太郎を支えたのはイヌでした。

イヌ 桃太郎さん諦めないで。あなたの体は僕が支えます。

ナレーター それにサルが続きました。

サル 何やっつんだ桃太郎。俺が足を支えてやる。その刀で風を斬るんだ。

桃太郎 よーし、オラ達の力を見せてやる。これがオラ達の力だ。

ナレーター 桃太郎が刀を抜き一振りすると、たちまち風は掻き消え、辺りには静寂が戻りました。

桃太郎 強さは示したぞ。さあ、ここを通してもらおう。

ナレーター するとキジは丁寧に頭を下げ。

キジ 無礼の数々申し訳ありません。私はあなたのような力ある者がこの地を訪れるのをずっと待つ

ていたのです。桃太郎様、どうか私も鬼退治にお供させて下さい。

イヌ 仲間が増えるのは心強い。宜しく願います。

サル それでより面白くなるっつーんならいいんじゃないか？

桃太郎 分かった。一緒に行こう。だが危険な旅になるぞ？

キジ 覚悟は出来ております。

桃太郎 サル。どうかきび団子を一つ、キジにあげてもらえないだろうか？

サル チツ。しょーがねえーな。一つだけだぞ。

キジ これは？

桃太郎 日本一のきび団子。一つ食べれば百人力だ。

キジ
ありがどうございます。それではいざという時に食べるとしましょう。さ、こちらに船を用意して

あります。行きましよう。

ナレーター
桃太郎達はキジの用意していた船に乗り、鬼ヶ島を目指しました。大きな波を乗り越えてようや

く到着した鬼ヶ島。それは岩だらけの恐ろしい島でした。上陸するとすぐに真つ黒い鉄の大きな門がドーンと立っていました。キジが飛んで空から中の様子を見る。サルが門を乗り越えて鍵を引き抜く。イヌがドドーンと門を押し開ける。桃太郎は刀を抜いて大声で叫びました。

桃太郎
鬼ども、鬼ども、出合え、出合え。悪い鬼を退治に来たぞ。かかって来ぬならこちらから行くぞ。

ナレーター
鬼達も負けてはられません。手に武器を持ち、桃太郎達を囲みました。

サル
面白くなってきたじゃねえーか。これでこそ鬼ヶ島まで来た甲斐があるってもんよ。

キジ
油断しないで下さい。赤鬼の手下とはいえ、鬼であることに変わりはありません。

イヌ
さあ、鬼退治の始まりだ。

ナレーター
桃太郎とイヌ、サル、キジはたくさん鬼を倒していききました。「りや敵わぬ」と逃げる鬼達。向

かう先は鬼達の総大将、赤鬼のいる所です。

赤鬼
俺を退治する等と言っているのはお前達か。

桃太郎
出たな赤鬼。

赤鬼
身の程知らずもいい所だな。力を過信した己の愚かさ。動けなくなつてから後悔するがいい。

ナレーター
赤鬼の強さは他の鬼とは比べものにならないくらい強大なものでした。一振りの刀さえ受け止めることが出来ず飛ばされてしまうのです。桃太郎達の体力は一方的に削られていきました。

キジ このままではやられてしまいます。皆の力を一つにまとめましょう。

桃太郎 分かった。皆で赤鬼に斬りかかるぞ。

ナレーター 桃太郎達は呼吸を合わせると、一斉に赤鬼に斬りかかりました。しかし、それを難なく受け止める赤鬼。逆に桃太郎達を吹き飛ばしてしまいました。大きな傷を負い、立ち上がることも出来ない桃太郎。イヌもサルもキジも限界に達していました。

人間にとしてはやるようだが所詮鬼に敵うわけがないのだ。

赤鬼 どうした赤鬼。オラはまだ動けるぞ。まだ諦めていないぞ。

桃太郎

赤鬼。何だと？

キジ 桃太郎様、これ以上は無理です。

イヌ 桃太郎さん。

サル バカヤロー。もうへろへろのクセに何強がつてんだ。

桃太郎 誰かがやらなければならぬ事。ならば、その誰かはオラがやる。

キジ 桃太郎様。

イヌ 桃太郎さん。

サル クツソー。これ以上何も出来ないのかよ。

ナレーター サルは心の底から悔しいと思いました。他人の悔しい顔を見るのが好きだったサルが、それはそれは一番悔しがりました。そして、ふと、気付いたのです。桃太郎から盗んだ、あの団子の事を。

サル 桃太郎、これを返すぞ。

桃太郎

これは……。

サル 一つ食べれば百人力なんだろう？イヌ、キジ。今がいざつて時じゃねえーのかよ。

キジ そうですね。今こそぎび団子の力を借りる時です。

イヌ 赤鬼、覚悟するんだな。

ナレーター 桃太郎とイヌ、サル、キジはきび団子を一つパクリと食べました。すると体の奥底から沸々と力

が湧いてきました。桃太郎達は再び赤鬼に挑みます。

赤鬼 人間でありながら俺と同じ力を持つたど？

桃太郎 どうした赤鬼。もつと本気を出してもいいのだぞ？

赤鬼 本気を？……そうか……。そうか。

ナレーター 桃太郎の言葉に一層激しくなる赤鬼の攻撃。しかし百人力の力を得た桃太郎達はびくともしま

せん。

サル 何だコイツ。何で笑ってるんだ？

イヌ 頭がおかしくなったのですかね。

キジ そうではない。そうか、赤鬼は……。

ナレーター 延々と続くと思われた赤鬼の攻撃も終わりを迎えようとしていました。赤鬼は疲れてはいまし

たが、疲れれば疲れるほど笑みが零れて来るのです。そして、とうとう赤鬼の動きが止まりました。

赤鬼の首筋に刀を突きつける桃太郎達。それでも赤鬼は笑ったままでした。

赤鬼 どうした。殺さないのか？お前達は俺を退治しに来たのだから？

桃太郎

オラが退治しに来たのは悪い鬼だ。赤鬼。お前は本当に悪い鬼なのか？

赤鬼

何？

桃太郎

鬼というだけで恐れられ、誰もお前の言葉に耳を貸そうとしなかったのではないか？それに傷付いたお前には暴力という手段しか残っていなかったのではないか？

赤鬼

俺は……。

桃太郎

赤鬼、オラはお前が怖くない。あんな笑顔を見せるお前を恐ろしいとは思わない。

赤鬼

俺が怖くないだと？

桃太郎

ああ。怖くない。お前は力は強いが心はてんで弱いのだな。だから怖くない。

赤鬼

そうか……。お前は俺が弱いと思うのか。

桃太郎

教えてくれ、赤鬼。お前はどうしたかったんだ？お前は本当は、何が望みだったのだ？

赤鬼

俺は……俺は話し合う相手が欲しかった……。友達が欲しかったんだ……。

桃太郎

そうか。ならオラ達がここにきて良かっただろ？

赤鬼

何がだ。

桃太郎

一気に4人も友達が出来たじゃないか。

サル

え、マジで？

桃太郎

オラはこれから強くなる。きび団子がなくてもお前と同じくらいの力が出せるように強くなる。

イヌ

それなら僕も負けていられませぬね。

キジ

今度は相撲で勝負というのはどうでしょうっ？

サル おつ、それいいな。相撲つっーのは力だけじゃないんだぜ？技も大切なんだ。

赤鬼 お前達……。

桃太郎 赤鬼を理解してくれる者はこれからいっぱい増える。だから安心するがいい。

赤鬼 お前は力だけではなく、心も強いのだな。こんな人間は初めてだ。俺は友の名を知りたいと思う。

サル 名前？そんなのさつき俺が呼んだろ？

赤鬼 もう一度だ。もう一度聞かせてくれ。

サル それじゃ、耳の穴かっぽじってよく聞けよ？こいつの名前は、

イ・サ・キ 日本一の、

桃太郎 桃太郎。

ナレーター

それから桃太郎はイヌ、サル、キジと共に赤鬼を連れて村へ帰りました。村人は大層驚きました。16
が、徐々に慣れていきました。それから1年に1回、お祭の時にはお互いの力を確かめ合うように
相撲が行われるようになったそう。めでたし、めでたし。